

## 腎機能低下患者におけるレボフロキサシン錠の適正使用に関する調査・取組

1 横浜市立脳血管医療センター 薬剤科

○原 弘士<sup>1</sup>、永井 徹<sup>1</sup>、白田 誠<sup>1</sup>

### 【諸言】

レボフロキサシン（以下 LVFX）は広いスペクトラムを持ち、内服薬の生物学的利用能が高く処方頻度の高い薬剤である。しかし、腎機能が低下している場合は投与量を調節する必要がある。当院は病院機能上、高齢者の比率が高い。また、他科併診から処方されることも多く、腎機能を配慮せず投与されることもしばしばあった。

LVFX 過剰投与が原因と考えられる腎機能低下患者の報告を受け、処方状況を調査、薬剤科の取り組みとして調剤時に腎機能を確認を行った効果について報告する。

### 【調査対象】

期間 1：2011 年 10 月～2012 年 5 月 15 日 期間 2：2012 年 5 月 16 日～7 月 23 日

期間内に 2 日以上 LVFX 錠が処方された入院患者

### 【方法】

電子カルテより LVFX 錠の用法用量を調査した。

対象患者の腎機能を Cockcroft-Gault の式により計算  
1) 正常腎機能 (CrCl $\geq$ 50) 2) 中等度腎機能低下 (50 $>$ CrCl $\geq$ 25) 3) 高度腎機能低下 (25 $>$ CrCl) に分類した。

### 【結果】

調査対象患者は（期間 1/期間 2）112 名/29 名であり平均 69 歳/69 歳であった。投与期間は平均 5.8 日/6.7 日であった。腎機能別では 1)72 名/21 名 2)35 名/8 名 3)5 名/0 名であった。

腎機能低下患者において適切に減量されているのは 2)3 名/4 名 3)1 名/0 名であった。期間 1 での減量患者 4 人中 3 人は投与設計時より薬剤師が関与していた。

高度腎機能低下患者に通常用量が投与された 4 名中 3 名に一過性の Cre 上昇が見られていた。

### 【考察】

期間 1 では腎機能低下患者において過量投与が多く見られた、取り組みにより適正に使用される患者が増えた。

今年度新設された病棟薬剤業務において、新規薬剤投与前の腎機能の確認が含まれている。今後は病棟薬剤師 n のチェックも重要となってくる。薬剤師による腎機能確認は継続中のため、当日までのデータも含め報告したい。

## 急性期施設からの転院増加における特定抗菌薬介入の効果

1 神戸通信病院 薬剤部

○畑中 由香子<sup>1</sup>

【目的】当院は急性期施設と連携し、転院患者の受け入れを開始した。よって、施設を超えた持ち込みによる薬剤耐性菌の増加が危惧された。そこで対策として特定抗菌薬の介入制を導入した。今回、転入院患者の増加による感染制御の推移に、特定抗菌薬の介入制が及ぼす影響を検討した。【方法】特定抗菌薬は抗 MRSA 薬、カルバペネム系およびニューキノロン系注射薬とした。介入の方法は、使用開始時や長期使用時に使用目的等を事前に処方医と ICT 薬剤師が協議し、その結果を ICC にて報告する。転入院患者が増え特定抗菌薬の介入制度の導入した前後の各 1 年間での、特定抗菌薬の使用状況と耐性菌の分離状況を後方視的に調査した。【結果】カルバペネム系薬の AUD は減少傾向がみられた。抗 MRSA 薬は、急性重症でなければ細菌培養の結果に基づき使用されるようになり、協議内容の受け入れ率は 94% と高かった。耐性菌の分離状況については、*S. aureus* における MRSA が占める割合、*E. coli* における ESBL 産生菌が占める割合、*P. aeruginosa* における PIPC、CAZ、IPM / CS、AMK および LVFX に対する耐性株の割合を算出したところ、*S. aureus* および *P. aeruginosa* において薬剤耐性率に有意差はみられなかった。【考察】介入制については、ICC へ報告することを医師に周知していたため、処方医側から使用目的、培養状況等の事前の連絡が増え、医師と協議する契機となり得た。抗 MRSA 薬が保菌患者に使用された症例が 1 例のみであったことから介入制は有用であったと考えられ、抗菌薬の適正使用が推進できたと考えられる。地域連携の強化に伴い急性期病院からの転院が増えたものの薬剤耐性菌に増加がみられなかったのは、特定抗菌薬への介入制の成果が一因であることが示唆された。

共同研究協力者：藤田 和也（神戸通信病院 薬剤部）  
足立 恵子（神戸通信病院 薬剤部）、北村 直之（神戸通信病院臨床検査室）、中澤 聡子（神戸通信病院小児科）